

10 日本語と英語の「言語間の距離」

外国語学習は数学や理科や社会などの他教科の学習と異なる点がある。それは、母語が学習に大きな影響を及ぼすことである。母語による外国語や第二言語（母語の他に習得される言語）の学習への影響を「言語転移」という。言語転移には、習得を促進したり容易にしたりする「正の転移」と、逆に、習得を妨げたり遅延させたりする「負の転移」がある。ところで、言語同士がどの程度似ているか、という概念は「言語間の距離」と呼ばれ、ある言語と言語の言語的特徴が似ている場合、言語間の距離は「近い」、似ていなければ「遠い」と表現される。学習者の母語と習得を目指す言語の言語的な特徴が似ている場合、すなわち、「言語間の距離」が「近い」場合、「正の転移」が生じやすく、その結果、習得が容易になると考えられている。ただし、言語的特性が近いが故に、かえって習得を妨げる「負の転移」が生じる場合もあることも判明している。しかし、全体的に見れば、言語的な特徴が似ている言語同士の場合、言語学習はより容易になり、求められる学習量も学習時間も少なくて済むと考えられている。「言語間の距離」の遠近が外国語学習の難易度に深く関わっているのである。

それでは、「日本語」と「英語」の言語間の距離は「近い」のだろうか、それとも「遠い」のだろうか？ 実は、言語間の距離とは、言語間の相互理解可能性（mutual intelligibility）や言語学的特徴、または外国語の教授や学習体験に基づく経験則から生まれた概念であり、言語間の距離を正確に測定できる客観的な指標のようなものは存在しない。しかし、言語学習に携わる教育機関や政府機関が作成した外国語学習の難易度表（習得に要する学習時間を基に作成した難易度ランキング）などを利用すれば、正確な難易度の確定はできなくても、ある程度の予測は可能かもしれない。ここでは、アメリカ国防省の外交官養成機関である Foreign Language Institute (FSI, 2020) が作成した「言語難易度表」を利用して、「日本語」と「英語」の言語間の距離について考えてみたい。この難易度表には英語の母語話者が外国語を学習した際、話す能力と読む能力が「標準レベル（“Speaking 3: General Professional Proficiency in Speaking (S3)”及び“Reading 3: General Professional Proficiency in Reading (S3)”）」に到達するのに必要な授業（学習）時間が示されている。習得にかかる時間が少ない順に1～4のカテゴリーがあり、各カテゴリーにはそのカテゴリーに含まれる言語が示されている。これによると、「カテゴリー1」は「英語により近い言語」のグループであり、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、オランダ語、デンマーク語、スウェーデン語など、主にヨーロッパの

言語が含まれている。このグループの言語学習に要する時間は、600～750時間となっている。一方、学習時間が最も長い、「英語の母語話者にとって極めて難しい言語」という「カテゴリー4」には、アラビア語、中国語、韓国語、そして日本語が示されている。このグループの学習時間は、2200時間となっており、グループ1の約3倍以上の時間が習得に必要であることが分かる。もちろん、これはある政府機関が独自に作成した資料であるため、学術的な観点からの更なる検討は必要であろう。また、外国語学習は学習者の個別の要因（学習意欲、年齢、学習スタイル等）により習熟度に個人差が生まれるので、ここで示されている難易度や習得に必要とされる学習時間はあくまでもひとつの目安でしかない。しかし、この表からも日本語と英語の「言語間の距離」は極めて「遠い」ことは容易に推測できる。そして、英語の母語話者にとって、日本語を含むアジアの言語が、ヨーロッパの言語と比べ、習得が極めて難しいように、日本人にとっても英語の習得は極めて難しいといえるだろう。

2019年度に実施されたTOEFL®テストにおいて、日本人の平均テストスコアは、アジア29カ国中第27位であった（ETS, 2020）。各国の受験者数や受験者の特性（学歴、受験回数、年齢など）が統制されていないため、このデータを鵜呑みにすることはできないが、過去数十年間に渡り常にスコアが下位グループにあることから日本人が英語が苦手なのは否定できないだろう。しかし、日本語と英語の「言語間の距離」を考慮すれば、国際的にみて日本人の英語力が低いとしても不思議ではないし、必ずしも日本の英語教育にだけ責任があるわけではないことは自明であろう。上記の表にあるように英語の母語話者が標準レベルの日本語を身につけるには2200時間が必要である。同様に、日本人が標準レベルの英語を身につけようとする場合も同程度の時間を要すると考えることが妥当であろう。日本では、2020年度より小学5年から英語教育が始まり、英語の学習時間はこれまでより長くなったが、それでも小・中・高の8年間の総授業時間は1085単位時間（約893時間）である。標準レベルの英語力の習得を目指すのであれば、圧倒的に不足している学習時間をいかに確保するか考える必要があるだろう。

（渋谷 和郎）